

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2012年 冬号 1月11日発行/季刊
発行人：竹内 章
連絡先：府中市分梅町 1-20-3
TEL 042-364-3428

ますます人気上昇中

満8年を迎えた援農ボランティア活動。昨年末に恒例の収穫祭を催しました。

当初、3～4人で市村良知さんの農作業をお手伝いし、5年後には田村実さん、そして昨年から小林茂さんへと広がり、ボランティアも25名に増えました。田村実さんの庭先での「収穫祭」でバーベキューを囲んで懇親を深めました。昨年入会のボランティアの感想です。(竹田勇/援農責任者)

援農させていただいて感謝

父はサラリーマンでしたが、実家には家の裏に小さな畑があり、両親がいろいろな野菜や果実、花を作っていました。鍬で畑を耕し、畝を作り、種を蒔きと、冬に雪で覆われている以外は、畑が休んでいる時はありませんでした。子供の頃は、畑仕事は両親に言われてたまに手伝うくらいでした。今回援農ボランティアと畑の学校に参加を申し込んだのは、土や植物に触れる農作業をしたいというのが一番の理由でした。

第1日曜日に、市村さん農場に通っています。農業は自然科学、化学など様々なことを知らなければいけないことや、生業としていくためには、なんと大変なことだろうと今さらですが思っています。あと、体力も必要ですね！ 援農で長ネギの植え付けの後、2週間位大腿の裏側の痛みとつばり感がとれず大変でした。でもいろいろな作業は楽しい！ 援農させていただいて感謝です。

皇帝ダリアが満開のもと収穫祭に参加し、里芋汁や焼きそば、焼き肉などとても美味しくいただきました。畑の学校には月に2回の参加で、しかも野菜作りに関しては知らないことが多すぎるのですが、継続していくことが大切！ と通わせていただくつもりです。援農、畑の学校と、これからもよろしくお願いします。(渡辺紀子)

体験を農を活かしたまちづくりにつなげたい

「府中かんきょう市民の会」で農業ボランティアの担い手が不足している、とお聞きし、また、昨年度には府中市の農業委員を務めさせていただいた縁もあり、どれだけお役に立てるものかわかりませんが、2011年の秋から参加させていただくことにしました。

毎月の農業委員会では、市内で、主に相続が要因となつて、農地が住宅等に転用されている実情に触れることとなりました。また法律では、都市農業が推進すべきものとして位置づけられていません。



援農ボランティア活動

税制でも土地法制でも、都市部の農地保全に対する支えが決定的に欠けているのが現実です。

しかしそうしたなか、府中市の農家の方々が、農業・農地を守るために、さまざまな工夫・ご努力をされていることも知りました。農業ボランティア体験を、農を活かしたまちづくりへの機運を市政で高めていくための提言活動につなげたい、と考えています。どうぞ今後とも、よろしくお願いいたします。(西宮幸一)

援農先農家を囲んで楽しい収穫祭

援農ボランティアに参加して、初めての収穫祭に出席しました。田村さん宅の皇帝ダリアの下でのバーベキュー・パーティー。先輩たちの用意いただいた料理と、畑の学校で採れたサトイモ、ダイコン、ネギ等がふんだんに入った鈴木英美子さんお手製の芋煮鍋を援農先の3人を囲んで楽しく頂きました。

私は、これまで会の行事は欠席していましたので、この機会にメンバーとの面識を得てとても良かったと思っています。またこの収穫祭が9年近く続いている事を伺い、先輩に敬意を表しますとともに、これからは出来る限り、援農ボランティアに参加し、誇らしく収穫祭に出席したいと思います。



ボランティア活動の作業後に頂く、新鮮でおいしい野菜のためにもこれからも頑張りたいと思います。
(須藤悦代)

援農先農家の左から市村、小林、田村さんを囲んで楽しめました

多摩川由来の 崖線の緑を保全しよう

昨年11月19日、多摩川に沿って存在する崖線の緑の保全を考えるシンポジウムが立川市内で開催され、当会会員も参加した。主催は「多摩川由来の崖線の緑を保全する協議会」で、構成は多摩川上流部から、青梅市、羽村市、福生市、昭島市、立川市、国立市、府中市、調布市の各環境保全担当部局と東京都の都市整備局緑地景観課。

シンポジウムの目的は、これまで行政や市民など関係者の努力で保全されてきた多摩川沿い崖線の魅力を紹介した会場展示と、会場で配布されたリーフレット「多摩川由来の崖線の緑を保全しよう」に示されたように、関係自治体と住民の連携を強めて、崖線の緑の保全のあり方を考えようというもの。

基調講演で亀山章さん(東京農工大名誉教授)は、立川崖線(多摩川沿いの崖線の総称…府中崖線、西府崖線も他の十数の崖線とともに、その一部をなしている)の成り立ちと自然的特性、千年以上に及ぶ人間が関わってきた文化と歴史、崖線の緑の保全に向けての課題と関係者の連携と協働について触れられた。

シンポジウム契機に 関係団体の連携強化を

あいにくの悪天候にもかかわらず、崖線の緑の保全に関心のある多くの市民が集い、熱心に傍聴されていたのが印象的でした。立川崖線は青梅市から調布市までの8市にまたがっており、関係する市や市民団体が崖線の保全活動や環境学習の場としてかわりを持って活動している様子がよくわかりました。

「NPO法人府中かんきょう市民の会」としても、府中崖線の保全について、平成12年から府中市長宛に要望書を提出したり、平成16年には「西府崖線を守る会」を発足させて、崖線沿いに設置される「JRの新駅(西府駅)開設」による周辺開発について、市長に面談を求め、崖線の保全について直接要望を伝えるなどの行動を行ってきました。

さらに、平成18年から、崖線の中に存在する「西府町湧水」(東京の名湧水57選の一つ)の保全に向けて、毎月湧水量を測定したり、夏と冬の年2回水質検査を続けており、最近では市民向けに崖線や湧水を広く知ってもらう目的で「西府わき水まつり」を開催し、崖線に生息する

立川崖線の緑守るシンポ 各地の保全運動連携の第1歩に

パネルディスカッションでは、基調講演を巡って5人のパネリストから崖線の緑と自然の魅力、それを子ども達に引き継ぐ環境教育実践、各崖線での市民運動と40キロに及ぶ崖線の緑を連携して保全する活動の重要性について語られた。

討論での主な意見を以下に紹介します(敬称略)。

(1)「ママ下」湧水と青柳崖線を適切に管理して絶滅危惧種でもある低温に棲息するホトケドジョウを保全するなど生物の多様性を守るために活動している(西田一也/ママ下湧水公園の会)。

(2)玉川上水と湧水の水温の違いなど、子ども達に五感で違いがわかる環境教育を行っている(山岸修子/環境カウンセラー)。

(3)行政域を越えての横の連絡を活性化させたい。市民団体も、このシンポをふまえ連携の第一歩にしよう(大塚高雄/東京の緑を守る将来会議)。

(4)情報交流、ゆるやか連携、一部協働行動の時期にきている(柴俊男/環境カウンセラー)。

(5)閉会あいさつでは主催者側から来年の取り組みとして、崖線の緑の保全にむけて「ガイドライン」の策定が表明された。



シンポの様子(上)と会場で展示された立川崖線図の府中部分(下)

生き物や植物などの写真パネルの展示会を開催したり、崖線や用水路の清掃活動を行っています。

このシンポジウムを契機に、関係する市や市民団体が連携して実施するイベントの開催など、東京都や協議会が窓口となって企画することを期待したいと思います。

(理事長 竹内 章)

キクイモ探しとイモ煮会

富士山の頭には長い雲がかかっていましたが、空は蒼く晴れ上がり、朝のうちこそ風が冷たく、「寒い」と、手をこすりあわせる様子も見られましたが、穏やかな「キクイモ探し」には良い日和になりました。

集まった子ども達は、ゴミ拾いをしながら、サッカー場南側の草地に向かいました。一緒に歩いていた親子が一生懸命、ゴミ拾いをしてくれました。スタッフは、しんがりになったこの子に気付かずキクイモ探しの説明にはいりません。ゴミ拾いは、全員でやるはずなのに…。

キクイモを探しの河原には野蒜が、あおあおと緑のじゅうたんのようでした。参加者は、枯れたキクイモの地上部の下を、一斉にシャベルやスコップで掘り始めます。「あったあった」、「生姜みたい!」、「ワー! スゴイソゴイ」と、あちこちで歓声が上がりました。根元を浅く掘ってみては、次々と移動する参加者より、2〜3本の根元をコツコツ掘り進めた親子連れの方が、収穫は多かったようです。目測ですが、少ない子で500g位、殆ど2〜3kgは持ち帰っていたようです。みなさん、折角の収穫を無駄にしないで、美味しく調理して食べて欲しいと願うばかりでした。

イモ煮会場に戻るまでの、空き時間に、お母さん達と、野蒜を掘ってみました。球根は小指位で、意外と小さかったのですが、「我が家は上の部分までネギの代りにして食べます。」「なるほど、アサツキのようですものね。」若いお母

水辺の楽校余話



ゆったりとした、至福の時間が参加者全員に流れているようでした。今回は、会場の都合で「焼いも」が出来なくて残念でしたが、「イモ煮会」もまたこれで、良かったと思いました。採れたキクイモ(正確にはイヌキクイモ)は灰汁があるので、水から15分位茹でると黄色い茹で汁が出るので、それを茹でこぼして、皮を丁寧に剥きます。それを、①フライにする。②素揚げにして甘味噌の上で弱火でこがす。③茹でたてに塩を振ってシンプルに。④崩れてしまったものは、残り御飯に混ぜて温め黄粉をまぶしておやつにしています…。等々、里芋と同じような利用が紹介されました。

今回の参加者は、子供36名、保護者24名で、60名でした。キクイモ探しで掘った後の埋め戻しを、指導すべきでした。(伊藤順理子)



第3回 府中エコ博 あきかん

平成21年度に初開催され、3回目を迎える府中エコ博(あきかん)は、2011年11月3日(木・祝)午前10時から午後3時まで、ルミエール府中コンベンションホール飛鳥・エントラスで実施されました。

本年度の実施は、地球環境温暖化などの環境問題に対する府中市民の意識啓発と、一人ひとりが行動をおこす大切さ、日常生活の中で実施できる方法、手段の具体的な紹介を目的にすることがありました。具体的なテーマは、2011年は



国連が定めた国際森林年であるため「CO2CO2(コツコツ)減らそう二酸化炭素〜国際森林年〜」とし、府中市の企業、N

PO及び個人から様々な提案がなされることにありました。

当博の開催に当っては、市民団体や学校、環境関連企業で組織された府中環境プロジェクト実行委員会及び行政の立場より府中市環境安全部、環境政策課環境改善係との協力で、本年5月より13回に及ぶ実行委員会を開催し過去の経験を参考に内容の深堀と役割分担を明確にし実行にこぎつけました。

実施内容は、エントラスでのブースによる環境関連企業の展示及び府中かんきょう市民の会他2団体の展示と忌野清志郎作絵本「プーアの森」(子供たちへの環境絵本)の原画展示、コンベンションホール飛鳥では、「私たちのまわりの企業に聞いてみよう」をテーマに市内企業4社と東京農工大による環境発表会と特別講演会として三浦豊東京農工大学准教授による「放射能について学ぼう」と題して、放射能の基礎知識や健康への影響についての解説が行われました。約一時間という短い講演でありましたが、時宜を得たテーマであったためか会場は満席でした。

府中かんきょう市民の会は、ブースで当会の案内及び最新号の会報を各30部置き配付するとともに、レンゲ祭り、田んぼの学校、小川の生きもの調査等の写真記事を掲載した展示コーナーを設け当会の活動内容を紹介しました。本年は当会を含むNPO・市民団体の参加が少ないことが気がかりでした。(佐藤秀夫)

ハケの道▶競馬場▶いかだ道▶お瀧神社とわき水▶東郷寺山門

府中みてあるきツアー



新市民の参加者に人気のあった東京競馬場

昨秋10月21日の「府中みてあるきツアー」に妻と2人で参加した。一日じゅう曇りの日だったが、参加者25人と事務局の3人、「ハケの道」案内人の竹内さん、「ウォーキング指導」の河野さんの5人が加わり、総勢30人で10時過ぎに出発。コースは、ボランティア活動センター(グリーンプラザ)→大國魂神社→妙光院→ハケの道→東京競馬場→ハケの道→いききの道→お瀧神社→東郷寺山門。歩行時間は約4時間半だった。

大國魂神社から妙光院への下り階段もハケの痕跡と竹内さんが説明。妙光院をでて、馬頭観音と馬霊塔前を通りすぎると、日本の道路としては珍しく歩道が広い競馬場通りにでる。歩道は競馬開催日には駐輪場と化す。クスノキ、シラカシ、イチョウなどが立ち並ぶ道を気持ちよく歩き、車道の中央分離帯にはケヤキが林立。目にやさしい、安心して歩ける道だ。

ほどなく東京競馬場にはいった。まず、河野さんによるウォーキング指導。背筋を伸ばし、視線は約15m先を見てあごをひく。膝をのばしてカカトから着地、体重移動をして足のつま先でける。そのとき腕もふる。今後、老人っぽくならぬよう、歩きかたには十分気をつけよう。

その後は、馬とのふれあい。白馬が厩舎前で洗浄されていた。その馬の脚の細さには吃驚。体重70kg. ならずの私とたいては変わらず、この足で私の約7倍の体重を支え時速60km以上で走るとは…。つぎは、井田是政のお墓見学。名前の是政が地名にもなっているように、この地の豪族だった。墓の周りにはエノキの大木が茂り、今でも子孫が墓参りにきている。思うに、場内に墓のある競馬場は世界中どこにもないだろう。レース開催のたびに安全を祈願しているそうだ。

場内での昼食のあと参加者全員で自己紹介。私は府中に住んで4年目になるが、それよりも新しい住民が多かった。

府中はほかの自治体にくらべて環境がよく、歴史がある土地柄なのでいろいろと知りたいのと競馬場を見学したい参加者が多かった。

一息いれて、9階のフジテレビ競馬中継室にむかった。スタジオ内は雑然としていたが外の景色は絶景だ。広大な敷地に緑の芝生、その緑と調和したモスグリーンの馬場、中央に中継用大スクリーン、競馬場外周にはかすかに紅葉した樹木が林立し、その先には多摩川と対岸の丘陵が垣間見える。

競馬場をでると間もなく「いききの道」という、生活の匂いがプンプンする幅約3mの道にでた。その閑静な生活道を約100mすすみ、右

側の階段をくだると崖線林の中ほどに大國魂神社末社のお瀧神社がある。神社下にはこんこんと湧く清水があった。5月のくらやみ祭では禊をする神聖なわき水でもある。市内に2つあるわき水の1つで、この地域の町名「清水ヶ丘」はここからきている。

時代に取り残されたような古道を歩くと、右側には多摩川と対岸の丘陵が見える。懸崖にはニセアカシヤ、シラカシ、サクラ、キツネノカミソリなどが雑然と茂る。この道を「いかだ道」ともいう。多摩川上流で伐採された木材を、いかだ流しの乗子衆が江戸に運んだ後の帰り道だ。仕事をおえた乗子衆の、いきのいい会話が聞こえてきそう。いまはハケが所々分断されているが、竹内さんの幼少時はずっとつながり、ハケ周辺でよく遊んでいたと説明された。

最後に、東京都選定歴史的建造物に選ばれた東郷寺山門に着いた。重厚で、なぜか懐かしさを感じる山門だ。春になると、しだれ桜と山門が見事な調和をみせる。映画「羅生門」のモデルとなった山門と聞く。

むかし「羅生門」を数回見ているので、その刷り込みがあつて懐かしかったのだろうか。府中の歴史を学び、競馬場を見学して、じつに愉快な一日だった。(葛西利武)



府中崖線に建つ東郷寺の山門

第5回 河原の植物観察会

昨秋、10月23日は前日からの雨も漸くあがり時折は雲間から薄日も射すよい観察日和となりました。

年一回行うこの観察会シリーズは市民の皆さんに好評で、これまで参加者は平均30名余りでしたが、今回はわずか8名に減り、少し寂しく感じられましたが、参加者全員が講師を囲んでじかに説明を聴くことができ、その点では良かったと思います。



出発地点は関戸橋上流のカワラノギク植栽地です。5月に種子を蒔き、夏場は寄生植物のアメリカネナシカズラを駆除しながら猛暑をしのいで無事生長し、観察会に間に合わせたかのように数十株のカワラノギクが開花しました。2002年に福生市沖の多摩川で国土交通省が立ち上げたカワラノギクプロジェクトに専門家の立場で参加されるなどこの花に特に造詣の深い講師の星野先生(東京農工大准教授)から「河川環境の変化などで野生種はほとんど見ら



無事成長したカワラノギクの群落



コスモスに似たハルシャギクも河原を彩っていました

れなくなり、こぼれたタネから芽生えて生長し花が咲き種子は残すが株は全て枯れてしまうため次世代が育ちにくい」など生態の詳しい説明を受けました。

この日の観察会では、その植物の生態や特徴などを詳しく説明したものと、名前の紹介だけに止めたもの、合せて約50種余りを取り上げましたが、そのうち、在来種が約30種、外来種が20種程でした。

今、多摩川では在来種と外来種の激しいせめぎ合いが続いていますが、繁殖力旺盛な外来種に在来種が駆逐されそうな光景もよく見かけられます。その代表的なものといえば外来植物のアレチウリでしょう。

野球場横の河川敷で、ヨシなど草の上一面に覆い被さったアレチウリを目の当たりにして皆がアアッと声を上げると、先生から「アレチウリは60年前静岡県で確認されてから各地に広がり、繁殖力が非常に強く特定外来植物に指定されていること。市内四谷の河川敷ではツバメの「ねぐら」のヨシ原を守るためボランティアの人達がアレチウリの駆除を行っている」などと解説が続きます。

行程の最後はロープ柵で囲った広さ約400㎡のレンリソウ植生調査区です。

春と秋に草刈をするなど、ここ数年の地道な取り組みが功を奏し、春5月頃には100株を超えるレンリソウが紅紫色の可憐な花を咲かせていたのですが、秋この時期となつては草丈の高いチガヤの草むらに隠れてその姿を見ることは出来ませんでした。

この日の観察会ではアキノノゲシ、ハルシャギク、アカツメクサ、オオキンケイギクなど何種か咲いている花も見られましたが、春のそれとは比べるべくもありません。

やはり市民の皆さんが参加する植物観察会は、小鳥がさえずり色とりどりの花が咲く春の季節がいいようです。来年の観察会は春に行うことにして散会しました。(佐伯郁男)

生まれ変わった

東京都農林総合研究センターを見学

東北大震災と福島原発事故で恒例のバス見学会が中止となり、その替りの研修先として昨秋10月18日、東京都農林総合研究センター（旧東京都農業試験場 <http://www.tokyo-aff.or.jp> 参照）へ、会員12名が参加した。

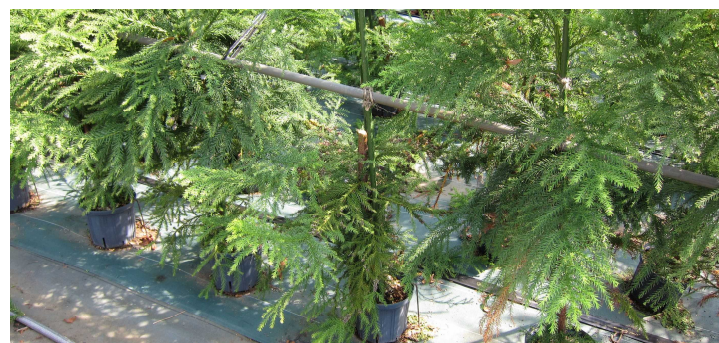
東京の農業は、農地面積が7,800ha（2009年7月）と昭和35年31,447haあったのが急激な都市化で縮小され、特に水田が極端に少なく、果樹・花卉を含めた畑作が中心となり東京都としては農林水産業はマイナーとなった。そんな中で都立農業試験場はどのように変わり、どんな試験研究がなされているのか興味があつた。

見学案内していただいた同センターの川村真次（研究企画室長、前任は安全環境科長）さんも説明していたように、都が平成17年から財団法人東京都農林水産振興財団に運営を委託している。従来の農業試験場、畜産試験場、林業試験場、食品技術センターが統合され、センターとなったのだ。それゆえ、農家だけでなく、広く都民の要望に応える機関となり、個人の相談に応じるだけでなく、成果を権利化する、関連企業、大学、団体との共同研究などに積極的に取り組んでいる。広大で、崖線がある緑豊かな同センターは立川市の観光百選にもなっている。

果樹・花卉・野菜等の畑作物（水稻を対象とした研究室はない）の生産から活用技術、畜産の生産性向上、豊かな森・緑化技術、食の安全性確保技術、機能性食品の開発



見事な省農薬キャベツ栽培



スギ花粉を出さない杉品種の改良試験



各種の芝の試験栽培

に至る幅広いテーマと取り組んでいる。シクラメンの新品種、無花粉スギ樹の育成、新資材等を活用した都市軟弱野菜（コマツナ、ハウレンソウ、カブ等）の省農薬・高品質生産技術の開発等が代表的である。

事前に質問をした次の事柄に対し、丁寧な答えが印刷配布された。①アルファルファ・タコゾウムシ対策 ②ウイルス病／トマト ③連作障害／野菜 ④夏作ジャガイモの成功事例

試験圃場の見学は、野菜畑→果樹園→植木畑→花卉温室などを回る。野菜畑では露地栽培なのに、ダイコン、ネギ、キャベツと病害虫に被害を受けていない見事な出来映え。ナスの栽培技術を真似てみたい。街路樹の研究成果が街路に顔見世する日はいつか。

バイテクを使った新技術が現実のものになるのを予感し少数で懸命に取り組む研究員の姿が目につくたび、拍手を送りたい。

同センターから歩いて10分程度の国営昭和記念公園を訪れる。週日なのに大勢の人出で、年配女性、社会見学の学童たちが多い。園内は5万坪あり、一番の人気スポットはコスモス畑、除草管理が不十分だったが、見事な出来栄。

こもれびの里を訪れるが、茅葺小屋の修理中、稲刈りは終了していた。府中市の農業公園も郷土の森を農業公園と兼業し、このような区画を造成すればと思う。（竹田 勇）



昭和記念公園のコスモス畑は満開

後世に残そう ハケと湧水

西府崖線で初の一斉清掃活動

昨年11月23日。約1kmの西府崖線に沿って、総勢13人が2班に分かれゴミ拾いを行った。右手に長トンゴばさみ、左手にゴミ袋を下げ、10時にハケ下のあずまやをスタート。

1班は東の本宿トンネル方面へ、帰りはハケ上から湧水地まで。2班は大山道まで用水沿いに…。1時間半までに集まったゴミは、燃えるゴミ5袋、燃えないゴミ14袋。缶やペットボトルの他に発泡スチロール箱、ビニール傘、バック、衣類や紙おむつまであった。

ハケの南面に沿って歩くこと約1時間半はとても暖かい日中で、普段は自転車や徒歩で行き来するハケ下だが、今日は一心不乱に地面と向き合いゴミ集めに専念する。

一人ではなく皆で一斉に行くことで、一種の競走心がわき大きなゴミを見つけると獲物を仕留めたかのようにわくわくしたのは私だけだろうか。ツツジの植え込みの中を数人でかき分けると、バックやビニール傘などが次々と…。業者が刈り込みする際に、ゴミを片付けることはしないため、いろいろなものがずっと放置されている。どんどん袋がいっぱいになりゴミ袋を持つ手が重くなってきた。

ハケ上を回ると、暖かい日差しとともに鳥のさえずりや鮮やかに色づく落ち葉が目を楽しませてくれる。普段から周辺の人たちが清掃をしていることからゴミはほとんどない。日頃からきれいにしていくと捨てられるゴミも少ないとよく言われる通りで、地域の人たちの気持ちも伝わってくる。

参加されたみなさんは⇒12～13年前はものすごく汚れていた記憶があり自分が呼ばれているようで今日は参加した。表面上はきれいになったがけっこうゴミはあった／ビンや陶器のかげらなど燃えないゴミが多い。生活用品類



のゴミが多い。／ゴミを見つけて拾い集めるとうれしくなった／「こんにちは」の挨拶に「ありがとう」や「ご苦労様」の返事を返してくれた／用水路の中を長靴で歩いた。カワニナやジミの貝殻を見つけた。たくさんいたザリガニはどこにいったのだろうかなど季節ごとの変化を見ておくのも大切／通年通水ができれば生きものも増えるのではないかなど印象を語られた。

西府崖線保全チームでは、これまで7年間毎月湧水調査活動、そして今年に入って初めての「湧水まつり」、市民懇談会や地層地質学習なども行ってきた。チームの一員である田中御夫妻が長年清掃活動を行ってきたことを受け、地域の方々と継続的に清掃活動ができるようにと春と秋の年2回行う方向でようやく今回の第1回目の開催にこぎつけた。(第2回は6月を予定) 今後も地域の方々と一緒に「より良い環境を次世代に引き継ぐこと」を進めていきたい。(チームリーダー・浅田多津子)

東北大震災写真展示と 紙飛行機が人気

NPOボランティアまつり

「NPOまつり」が49団体、企業が参加して、昨年11月12日から2日間グリーンプラザなど3カ所で行われました。第9回となるこのまつりは、府中市内で活躍する市民団体の活動を、広く市民に紹介しようと府中市と「府中NPOボランティア活動センター」が共催し、参加する市民団体が企画、準備、設営から運営まですべてを担当するユニークなまつりです。

「府中かんきょう市民の会」も毎年常連として参加し、会のPRを続けており、今回は第1日目に会の紹介と当会員の写真家、勝谷寛子さんの「東北大震災写真集」の展示、2日目は恒例の「親子で紙飛行機を作ろう」を準備し実施しました。

写真展では、無惨な被災地の写真をブース大半を使って展示し、静かに見ている人の姿が印象的で、「この写真はいつ撮ったのか、現地に何回行ったのか」など質問する人も

いて、迫力ある写真に見入っていました。

紙飛行機作りでは、総勢7名の会員の協力で次々に来場する親子に手慣れた調子で作り方を教え、子供たちはニコニコ顔で作ったり飛ばしたりして、午後2時には用意した100機を作り終え早々と店じまいとなりましたが、会場の内外で紙飛行機を持った親子が目につき飛行機の翼に「かんきょう市民の会」の名前を張りつけるともっとよいPRになるなと思いました。

ボランティア活動は、あらゆる機会を捉えて幾度もこつこつとPRに努めて、会の名前と活動内容を市民に理解してもらうことが大切で、市民の集まる「イベント」などに積極的に参加してゆくことが必要だと実感しています。来年はもっとおもしろいテーマを考えて参加するぞ！。(羽尻元彦)

自転車

不安抱えたまま 車道通行へ



警視庁が車道端に設置する幅50センチの自転車レーン

この春から歩道での歩行者の安全を計るため自転車は高齢者と子どもを除いて車道を走らなければならなくなる。これまで歩行者を脅かしていた立場から一転して、こんどはクルマに怯えながら走るという立場に置かれるので、車道走行に馴れない自転車はたいへんだ。

なぜなら、歩道を走っていたときと、車道を走る場合とでは大きな違いがあり、歩道走行の延長線では走れない。

警視庁は幅50センチの青いラインを車道の左端に設置するというが、すぐ脇

をクルマが通り抜けるので、ふらつかないことが絶対条件となる。いままで、自由に歩道をふらつきながら走っていた自転車にとってはかなりのプレッシャーだ。

また道路端の状態も良くない。亀裂や穴ぼこ、アスファルトが溶けて盛り上がったコブ、側溝蓋の上しか走れない場所、降雨時滑りやすい金属製のマンホールや側溝網、車道側に伸び放題の植え込みなど数えあげたらキリがない。段差こそないものの、こうした自転車走行の障害物を避けつつ、走るのはそれなりの慣れも必要だ。転倒でもすれば、クルマも急に対処できない。こうしたことが、普通の「ママチャリ市民」が懸念するところだ。

比較的大きな交差点には「左折レーン」がある。ここを直進する場合、今までのルールは、自転車は「左折レーン」を通行するのだが、ここに入るべきかどうかで戸惑う。「左折レーン」に入れば、左折車の巻き込みという危険があるからで、「左折レーン」よりも「直進レーン」に入るほうが合理的だが、どうなるかは不明だ。また「左折レーン」と「直進レーン」にはさまれることに恐怖感を抱く人もいだろう。

さらに車道走行に関しては、自転車の存在をクルマに知らせるために、なるべく派手な服装で「自己防衛」しているサイクリストも多いが、普通の「ママチャリ市民」は概して地味な服装が多く、夕方や夜間のグレイや黒色に近い服装では、クルマに視認されにくく非常に危険である。対策は反射材や、オランダで義務化されている点滅赤色灯で対応できるが、こうした配慮なしに「車道を走りなさい」といわれても、安心して走れるかどうかはわからない。今回の警察方針に、そうしたキメ細かい配慮を求めたい。

このように車道通行の不安が解消されないもとでは、車



自転車の車道通行対策のイメージ(毎日新聞 2011年10月25日より)

道での自転車の逆走というルール違反が、今よりさらに増えることも心配だ。なぜなら、「ママチャリ市民」のなかには、背後からくるトラックに恐怖心を抱き、クルマやトラックが向かってくることを目視できる逆走で、身の安全を守りたいと思っている人が多いように思う。これが非常に危険な行為であり事故を誘発することまで、彼らには理解できないし、ましてやルールを守っている自転車をまきこみ、事故の危険にさらしているという自覚などない。逆走が正常な交通を妨げているという自覚がないのが恐ろしいが、これが現実だ。

この逆走自転車との正面衝突を避けるため、正常通行自転車が道路中心部側に寄ることでクルマに巻き込まれる危険性、また自業自得だが、逆走自転車はドライバーから見て、その発見から回避操作までの時間が短いために、事故になる危険もある。警察方針では、この逆走自転車の危険性と、それへの指導や取締りについてはなにも触れていないし、取締り項目の対象にも上がっていない。

警察が「自転車の車道通行」を徹底させた場合、この逆走自転車問題を解決しないと、ルール違反の自転車を避け道路中央寄りに膨らんだルールを守った自転車がクルマにはねられるという事故が多発すると思われる。特に、駐停止中のクルマやトラックを避けて道路中央寄りに膨らんだ時、また同じシーンで避けたトラックの横で、逆走自転車と鉢合わせすることもあるので、特に危険だ。信号無視やブレーキなしのピスト自転車より圧倒的に多い違反は逆走自転車だ。警察には、ルールを守っている自転車にとって危険な存在である駐車違反と、この逆走自転車の指導と取締りを強化して、安全な自転車の車道通行を実現してもらいたい。

(館 浩道)